

## 精神分析のはなし 第17話 「プラスとマイナス」

JAM：社会、ことば（ラング）は今日、驚くべき法的ダイナミズムによって活気づき、導かれ、切望されています。このダイナミズムの原動力、その主となる語は、「権利の平等」、「平等であるべきだ」、ではないでしょうか？

個人、つまり各自について話しましょう。「各自」とは、「ひとつである」と了解されますが、各自は、ほかの「各自」と同様に価値があり、ほかの「各自」と同じ権利において主張するということです。ですから法的な平等性というこの命令にたいし、社会のなかで障壁を作るすべてのものは、遅かれ早かれ、いつかは、差別や不正として刻印を押され、復権要求の対象となります。

「父の名」をめぐる組織される家庭、母の身体からの出産—それらは大昔からの所与であり不変的だろうと思われていたものですが—、それらは革新により修正され変貌しました。この革新とは法的で科学的なものでもあり、今後多様化していくでしょう。主要な問題は、権利と生命のあいだの関係です。生命は簡単に権利に適合するものではないのですから。

子どもは問題をうみます。子どもは自律的でないのであるから。その一方で、保護者達も含めた、子どもの権利をどのように保護すればよいのでしょうか。

妊娠も問題をうみます。胎児は個人なのか、それとも違うのか。最初の瞬間から削除を禁止されている諸権利を、胎児はもつべきなのでしょう。

それから最後に、セクシャリティー自体も、問題をうみます。個人が性をもつということ、男性と女性が存在すること、性的な差異は、平等性との関連では、思考するのが大変むずかしくなります。諸個人の理想的な平等性は、ひとつの権利の侵害、スキャンダラスで独裁的な侵害ではないのでしょうか？

男性（le masculin）、女性（le féminin）と書かれます。しかしそれらは本当にアイデンティティーなのでしょう。それとも単なる同一化なのでしょう。同一化とは、あたかも男性であるかのように、女性であるかのように、振舞う、という、見せかけのことで、そうなのではないかと、ひとは自問しています。

それは演劇なのでしょう。より正確に言うなら、それは社会的な演劇なのでしょう。それは単に、様々な文化における、様々な役割の問題に過ぎないのでしょうか？

私たちのあいだでは—告白しなければなりません—、男性・女性の役割であるものとして、毎日、新しいものが存在します。モードがその影響を行使しています。ユートピアが、セク

シャリティーを生きるその人自身の仕方を発明するよう、促しています。そして、その正面には、それは論理的にあっていうものかもしれませんが、伝統が反発し、ひとは神のパロールの名において、自然の名において、さらには用心の原則の名において、蜂起しています。そこでこそ、ひとが精神分析家のほうに向きを変え、分析家に無意識は何を言っているのか、これに関して無意識から受け取るメッセージとはどんなものなのかを問うのです。

無意識は賛成なのでしょうか、反対なのでしょうか？

そうですね。セクシャリティーについては、無意識はずさされているようです。あたかも無意識がいま働いていないかのように、社会や歴史のなかで起きていることをまったく知らされていないかのようなのです。

無意識は新聞を読まないし、テレビもみない。集団の出来事も知らないし。無意識はむしろつねに同じことを繰り返し、ステレオタイプを再生産しているらしいのです。さらにそれはどのようなステレオタイプなのか知らなければなりません。

あらゆる精神分析家たちが同じものを聞いているわけではありませんし、同じことを理解しないのでもありません。フロイトに立ち戻って考えるなら、無意識は、女性とは何であるか、男性とは何であるかについて、かなり固定的な考えを持っていると、フロイトは考えました。

彼によると、究極的な経験というものが存在していて、それが、無意識において二つの性別のすべての表象を、決定的に固定するのです。それは身体の解剖学的な差異を目にすることです。身体の解剖学的な差異を目にすることから、女性は、男性とくらべて、何かマイナスをもつ、女性は永遠に「マイナス」という印により刻まれる、ということが帰結されるのだろう、と、フロイトは考えました。

それで、女性は「持たない」存在であることに捧げられていて、無意識的には修正不可能な不正を被っていて、自身に永遠に欠けるものを欲望し、欲しがり、復権要求するのだろう、と言います。

このように女性たちはフロイトの分析家としての実践のなかで姿を現しました。原初の、過激で治癒できない苦しみをもち、打ちひしがれた存在として、現れました。それは遅かれ早かれ表面化して、男性から一つまり「持つ」人たちから一だけではなく、女性自身からも、劣ったものとみなされる存在として、でした。

フロイトはつねに女性のなかに、この欠如が浮かび上がるのを見ていました。それは読解の網目で、それを使って彼は女性患者たちの話を理解していたのです。女性が子どもを望むのは、この欠如を埋めるためである。女性がひとりの男性にしがみつく、それはこの欠如を埋

めるためである。女性が外見に気を配り、美しくする、自分を見つめる、べつの女性たちを眺める、それは自分の身体イメージが持ち上げられ輝かしくあらなければならないからであり、その身体が、現に被っているその欠如を覆うためである、と。

今日では、ひとは女性についてのこの概念化についてフロイトを大変恨めしく思っています。フロイトはただその時代の偏見を表現したのだとひとは、考えています。ひとが言うように、ファルスの優位を認めたのだと、フロイトは非難されています。男性、男たちの社会的政治的特権を正当化していたのだと、ひとは彼を見做しています。

それらの非難を少し和らげるためには、フロイトがおそらく本当に女性たちの声を聞いた、最初の人物であったことを忘れてはならないでしょう。フロイトは彼女たちのディスクール、嘆き、そして幻想を、真剣に受け止めた最初の人物だったのです。

そして幻想というものは、そのものとして存在していて、正しい (correcte) もものではありません。幻想は、ひとがそうであってほしいこと、ではありません。例えばこういうことが起こります。ひとりのフェミニスト、真の闘争家がまさに分析を始めるのを決めたことがあります。なぜなら彼女の幻想のなかで、享楽に到達するために、彼女は自身がぶたれ、虐待されると想像しなければならないことがあるからでした。さらにその女性は恋人のことを愛していましたが、しかしながらその恋人と性的行為をするときには必ず、彼女の身体は誰かべつの女性の身体であり、恋人は自分を裏切っているのだと想像しなければ行為ができませんでした。そして彼女は不感症でした。

ここにあるのは価値と幻想のあいだにあるひとつの分裂、対立です。それは無理解としばしば苦しみのなかに生きているものです。幻想には惰性というものがあり、それが問題を作っているのです、この問題は年月をかけて解決されるべきものでしょう。

そうです、フロイト以降、多くのことが起こりました。習俗の自由化、身体の誇示、性教育、他にもあるでしょうか。しかし性的器官、性的欲望、性的行為の発見というものが、誰にとっても決して単純なことがらではないことは、つねに現代的な事実でありましょう。

それは今も変わらず忘れることのない痕跡の発見を残しています。性生活の方向性、その様式にとり決定的なものであり続けています。しかしフロイトが明らかにした、「マイナス」という印において問題となっているものを読解し、理解する、ただひとつのやり方などと言うものは存在しません。

まず始めに、男の特権を作っているであろう「プラス」の、本当の性質とは、どのようなものでしょうか？この「プラス」の印はよく知られた、よく目にする、印象的で把握できるひとつの器官に与えられています。それは注意をひき、その持ち主、自身の表象において大き

な役割を演じているものです。

しかしまさに、この持ち主は、それほどではないのです。むしろ持ち主自身はこの器官について重たく感じていて、頭のなかではこの器官が意志による拍動に応答しないことに悩んでいるのだと、すべてが示しています。この器官はむしろ身体において自律的な公国のようなものか、あるいは身体の外にある孤立した区画のようなものすらあるのです。

モンテーニュはそのエッセーのなかで、「この器官は不従順であり、従わない」と言っていました。それはバイアグラがでる以前のことで、

男性とは「持っている」者のことです、しかしまさに、彼が「持っている」ものを、彼は完全には持っていないのです。彼の財産、彼の所有物はつねに脅かされています。

この器官は享樂であると同時に、象徴でもあります。享樂とは何であるかについては、その器官はじっさい、確かに限定された、明らかな享樂の座です。この享樂は計測されることさえもあり得ますが、この享樂は、身体全体のそれよりも、この器官自体の享樂のほうが大きいのです。この享樂は器官からくる享樂であり、存在の享樂ではありません。

それから象徴も存在します。この器官は古くから、ある象徴の支えでした。性的欲望の象徴でした。それはそそり立った栄えあるファルスのかたちです。しかし現実には、このかたちは間隙的なものです。ひとはそれを知りすぎていますよね。それは恒常的な状態ではなく、この器官が享樂を一度迎えたなら、その栄光から失墜するのです。したがって、よくこのパラドックスを理解しなりません。解剖学と享樂のあいだに、記号の反転が存在します。

享樂が問題となる場合は、その記号「マイナス」は男性の側にあります。セックスをするのが問題になる場合は、自身の身体の一部を使ってピークを迎えるのは男性のほうです。彼が行為において道具をもたらし、彼はその道具が消失したり道具を失ったりするのを見ます。そして彼は一種、武器のない状態となる、のです。

男の享樂とは、かくしてつねに限定されていると同時に脅かされているものです。この限界とこの脅威とは、自身の享樂を印づけていますが、同時に自身の思考、幻想、身体の生き方、身体を感じる仕方を印づけてもいるのです。

男性のなかには、何らかの仕方で、越えていかないある限界の存在が見られるものです。それは同時にリスクと危険を伴ってしか超えないという限界です。(限界の) 縁というものが男性に押し付けられています。それは小空間のなかで組織化されていて—こう言ってよければ、放出のようなものです—小さな器官による放出のようなものです。

慎重さ、正確な計測、正しい環境に対して高い価値をみるのは、男性の側なのです。尊重しなくてはならないきまりが存在し、秩序が存在し、すべての人に平等に課される非人格的秩序が存在します。尊重、守るべき距離、ヒエラルキー、順応主義。象徴の支え手であることが男性をすべて同じにしているかのように、すべてが通るのです。そして、分配された秩序のなかにおける、自身の場に、各自をつかせるのです。

それはまた、なぜ男性が（法の）違反という幻想に捕らわれているかを説明するものでもあります。リミットを超える、彼方へ行く、全力に達する、理想を高く掲げるなど、男性は「すべての者は同じである」と「例外」のあいだに捕らわれています。あたかも従順と英雄主義のあいだに存在するかのようです。

そしてまさに、女性の側では、リミットへのこの根本的關係が存在しないのです。

女性の享樂とは、身体の正確なあるひとつの場に委ねられているわけではありません。器官の享樂の彼方まで、女性の享樂は進むものです。それは身体全体、存在全体を動かし、それは侵襲的なもので、あふれるもので、その享樂をどこに位置づけたらよいのかひとは分かりません。ひとはさまよい、女性の享樂は「マイナス」の記号で印づけられてもいません。しかし、「プラス」の記号で印づけられていると言うのは、まだ最低限のことしか言っていないことになるでしょう。むしろ女性の側のセクシャリティを印づけるのは、「無限」、「リミットなし」という記号です。

確かに、それは問題がないわけではありません。「リミットなし」というのは女性が自分の身体と持つ關係という点で、女性に困難をもたらす可能性があります。かたちとの關係、この身体の統一性自体との關係において、です。女性はそこで自分を認めることに苦勞したり、不在、不完全、強固でないといった感覺をもつかもかもしれません。

享樂との關連については、底のない奈落のように女性に現れることがあります。それで女性はそこに入らないように、そこに落ちないように自制します。女性はそこで不在だったり、無感覺になったり、自分はべつの女性であると想像したりします。

また、この奈落から身を守るために、女性はいわゆる限界を課す男性を探すこともあります。その場合ときおり女性は奴隸のように見えるものです。

男性はというと、昔から女性の享樂には限界を課すことに熱心でした。脅かされた所有物を守る秩序のなかで女性を帰還させようとしてきました。文明とよばれるもの、文明とは、ひとが女性の享樂を抑制しようとして發明した、様々な仕方のことです。女性は、まさに、失うべきものがなにもなく、秩序ときまりに対して男性よりも執着していないからなのです。

男性は、まさに所有者であり、荷が重く気づまりで法により困惑させられているのです。まさにそのせいで、偉大な思想において、理想において、英雄主義において、自らを昇華することが可能なのです。しかし象徴との関連では、女性とは、どれほどより自由で、より本当らしく、よりリアルなものとして現れることでしょうか？女性に極端に至るまで、理性に耳を貸すことをせずに、ひるまずに、もっともっと遠くに行くことができます。女性にとって勇気は、男性に対してよりも自然なものであり、例外的な状況の勇気と同じく、毎日それが見られるものです。

その女性とは、ラカンがしばしば描いていますが、フロイト的女性の裏面です。

しかし・・・気をつけてください。それは肖像ではありません、ラ・ブリュイエールの「人さまざま」ではありません。セクシャリティは純粹に単純な所与、ではないのですから。各自、おのおのの「語る存在」が、男もしくは女として性別化をなしとげるのです。

以上。どのような読解の網目をもちいて、精神分析家たち、さまざまな精神分析家が分析にやってくる男性もしくは女性の話を聞くのかを理解してもらおうと、私はここでリスクをおかしました。